

161

特247

355

本

現下の国際情勢と軍縮問題

国際協会發行



0055869-000

特247-355

現下の国際情勢と軍縮問題

洪泰夫・著

国際協会

昭和9

AJB

特247
355

現下の國際情勢と軍縮問題

海軍少將 洪 泰 夫



歐洲大戰後の平和條約に依りまして、歐洲には多數の小さな國が産れ出て、又聯合軍に加擔して戰爭に勝つた國は、何れも夫夫其の領土を擴張したり、色々の權益を得ましたが、是等の國々は戰敗國の勃興や復讐を防ぐと共に、他方折角獲得し得た己の立場を保護して何處までも其の現状を維持する爲に、盛んに平和を高唱し、若しも此の現状を少しでも變化させ様とする者がありますれば、其の理由が何であらうと、又事柄のよし惡しを問はず、一概に之を平和の破壊者であるとして騒ぎ立てるのであります。國際聯盟は一口に言へば、是等の現状維持主義を實行し、徹底せしむる國際機關であると申しても大した過言ではない様であります。でありますから自國の存立

に對し、自ら頼むことの出来ない小國は、國際聯盟を其の存立を保證して呉れる唯一の機關であり、又力であるとして祭り上げ、又大國は之を利用して、各々自國の對外政策を有利に導こうとして居るのであります、是等の國々は國際聯盟がなければ直ちに自分の國の存立が危くなつたり、又自國の利益を擁護して行くことが出来なくなつたりしますので、國際聯盟を何處までも尊重し、又將來出来得る限り、之を一層強力なものに仕立て上げようと希ひ且つ努力してゐるのであります。でありますから滿洲問題に關して、聯盟の國々が眞向から日本に盾を衝いたのは、勿論彼等が東洋の事情に就て認識が不足であつた點もありますが、實を云へば自分の國が可愛いからであつて日本が憎いからでもなく又支那が可愛相であるからでもなかつたのであります。即ち聯盟がモットーとして居り又彼等の死活問題であります、現状維持主義の本尊がぐらつき、自分等の唯一の頼みとして居る命の綱が切られるからであります。由來國際聯盟のやり方には、歴史や、民族や、傳統や、領土の大小や、資源の貧富や、文化の程度や、國家組織の如何等、有ゆる點に於て大きな相違のある國家を、千編一律に同

一の尺度を以て律せんとする所に大なる無理があります。

又現在其の地位を占めて居るからと云つて其の適、不適に就て少しも頓著なく、未來永劫其の地位を占めるべきであると定めて終ふことは、生物進化の法則にも反すること、人に就ても亦國に就ても同様でありますが、其の生存發展は或る意味に於て不斷の戦争でありまして、不適のもの存在は何時の間にか淘汰されて行くのが自然の法則であります。又一方現在の平和は、各國の均衡に依つて保つて居るのであるから現状の變化は直に均衡を破り平和を破壊することになると云ふものもありますが、元來均衡と云ふことは極めて不安定なるものであります、之を維持せんが爲には外界の變化に應じて、日常不斷の修正改訂を必要とするものであります、是等の自然法則や現實の情勢に頓著なく、國際聯盟が、極端なる現状維持主義を固執する所にも亦大なる無理があると思ふのであります。是等の無理を何時までも押し續けて行くことは、自然の趨向に逆行するものでありますから遂には行き詰りになることは當然の理と謂はねばなりません。現在歐洲が大戦前に劣らない不安の空氣に蔽はれ、戦争の危

險に晒らされて居ると謂はれて居りまするのも、此の自然の趨向と、現状維持主義固執との衝突の結果に外ならないのであります。各國は此の間に處して、仆れかけんとして居る聯盟の立て直しに躍起となり、他方、聯盟の外に、他の何者かに手頼るのでなければ不安を感ずる様になり、聯盟を外にして、同盟とか、協商とか、恰も大戦前の状況に似た、合従連衡の現象を産み出しつゝあるのであります。

世界主要國の状況を簡単に申上ますれば、獨逸始め戦敗國は平和條約に依り、手も足も出ない様に縛られて居るのであります。其の當時は之を如何ともすることが出来ず、已むなく隠忍して黙つて居りましたが、年月の經つに従ひ、此の儘では國民は餓え國は亡びるの外はなく、如何に戦敗國でも此の状態で何時までも我慢は出来ない何とか局面を打開しなければならぬと云ふ聲が盛んになり、國內に國粹主義者の勃興を來たし、戦債の不拂、軍備の充實等、現状打破の實行手段に邁進する様になつたのであります。昭和七年の二月に開催せられて今日尙名目丈けはありますが、實質的には決裂したと同様になつて居りまする壽府一般軍縮會議に於て、獨逸はヴェルサイユ

條約に依る自己の軍備制限を破棄し、延いてはヴェルサイユ條約全般に亘る改訂の端緒を開くことが、彼れの眞の目的であつたのであります。同會議に於て獨逸は、ヴェルサイユ條約に於ては他の國が、軍備の縮少制限を行ひ易いようにすることを前提として極度に獨逸の軍備を制限せらるることを承諾し、今日まで十數年間に亘り忠實に之を守つて來たのである。然るに、各國は軍備の擴張こそしたれ少しも軍縮を行つて居ない、獨逸はもう之以上我慢は出来ない、各國が獨逸の制限せられて居る軍備の水準まで下るか、若し之が出来なければ獨逸は自國にのみ禁じられて居る、軍用航空機、タンク、重砲等を保有し、一部國境には要塞を築き、又常備軍も増加する等、國防上他の國と同一の取扱を受くべきものであると云ふ事を終始強硬に主張したのであります。之が所謂獨逸の軍備權平等の主張であつて、其の實現困難と見るや、彼は昨年十月、軍縮會議から代表を引揚げ、續いて國際聯盟をも脱退して、其の強硬なる態度を中外に宣明したのであります。其の後佛國は之と直接交渉を試み、英、伊兩國亦種々斡旋をなし獨逸の態度緩和に努めて居りますが、彼は其の主張に對し強硬なる態

度を固執し、益國內的結果を強固にして、一步も譲らないと云ふ意氣を示して居ります。

六

伊太利は、ムソリーニの獨裁政治も既に十年を越え、其の基礎も定まり、最近其の國際的地位を著しく高めて來ましたが、元來伊太利は大戦後の分け前に不平を有し、佛國とは根本的に利害を異にし、國際聯盟に對しても亦佛國の小國誘導に飽き足らず或は聯盟規約の改訂を欲し、時に觸れては聯盟脱退を仄めかしてゐる位で、對佛及對聯盟關係に於て、將亦對ヴェルサイユ條約に於て獨逸と一脈相通するものがあり、獨逸の軍備權平等や再軍備の要求に對して好意的態度を持つて常に佛蘭西を牽制して居るのであります。最近オーストリア問題でヒットラーと相容れざるものがあり、寧ろ佛蘭西と協同的態度を執りたるかの感がありまするが、之は單に一時的の現象であつて之で伊太利の態度が、根本的に變化したとは思はれないのであります。

伊太利は、總ての點に於て、歐洲大陸で佛蘭西と優位を争はうとして居ります。軍備に於ても佛蘭西と均等なることを目標とし、華府會議では主力艦航空母艦に於て佛

國と均等を獲得しましたが其の後補助艦に就いても常に佛國との均等を主張し、倫敦會議に於ても強硬に之を固執して遂に佛國と共に條約に加入しなかつたのであります。が、彼は自國の財政狀況等よりして極力佛蘭西の軍備を低下せしむる事に依て佛伊を均等と爲さんとするのが彼の對軍縮態度であります。

英國は大戦後、財政上、軍備の整備を一時緩和するの必要を生じ爲に華府會議では、主力艦、航空母艦に於て米國との均等兵力を認め、又労働黨内閣の時倫敦會議では、更に補助艦に於ても米國と均等兵力を認むることとなつたのであります。が、保守黨始め英國の海洋に對する傳統的立場を重視するものは、之等の條約に對し相等の不滿を有して居るのであります。英國としては戦後の財政不如意なると、引續く、世界的不景氣に依り、未だ軍備充實に専念することが出來ず、自國の財政狀況の好轉するのを先決問題として、倫敦會議後は佛伊兩國海軍の補助艦の制限協定成立に努めて自己の海軍軍備の安定を圖り、且つ歐洲大陸國の陸軍、空軍を制限して自國の國防を安固ならしめると共に歐洲の政情を安定せしめ、景氣回復の素地を築いて將來の飛躍を期し

七

ようとして居るのであります。壽府の一般軍縮會議に於ても自分は歐洲大陸各國の紛争の渦中に巻き込まれないと同時に、巧みに之等を誘導して其の目的を達することに努め、獨逸に對しても、此の見地に基いて好意的態度を持し、伊太利を引き寄せて共に佛蘭西を牽制し、壽府一般軍縮會議が愈望み薄となりました今日に於ても、尙ほ且極めて執拗なる態度を以て何とか之を物にしようとして居るのであります。

英國は最近其の財政狀況も漸次好轉して來た様であります。空軍の充實問題もありまして、歐洲大陸の情況に無關心であることは出來ない關係上、空軍、海軍同時に擴張充實を圖ることは困難でありませうから、來るべき海軍軍縮會議に於て、如何なる態度に出でまするか、英國に執つて劃期的情勢を招來すべきものとして、大に注目を要する所であります。

佛蘭西はヴェルサイユ條約を金科玉條として、獨逸の勃興、復讐を徹底的に防遏し、國際聯盟を中心として、自己に都合の良い狀況に、歐洲各國を指導して行くことを其の根本の政策として居りますので、獨逸の再軍備や、ヴェルサイユ條約を無視する態

度には極力反對し、英國や、伊太利の牽制を巧みに潛り抜け、飽迄自己の政策遂行に努力して居るのであります。獨逸が軍縮會議を脱退した後も、或は之と直接に、或は英伊兩國の斡旋を介して交渉を續けて居ますが、依然強硬に其の態度を固執し、最近は英國や伊太利の對獨態度に飽き足らず、已むなく蘇聯邦に接近し之を聯盟に加盟させ、極力獨逸に對抗して居るのであります。又佛蘭西は華府條約に相等の不満を有し、壽府三國會議にも參加を拒絶し、又倫敦會議に於ても遂に條約に加はらなかつたのであります。佛蘭西は海軍兵力に關しては、現在、伊太利との間に概ね一〇對六の優位を占めて居りますが、之れを何處までも保持して行くと云ふのが佛蘭西の方針であります。伊太利と均等兵力を認めるが如きことは、絶対に不賛成であるとの態度を示して居ります。最近、若しも伊太利が三萬五千噸の戰艦二隻を建造すると云ふのが事實とならば佛蘭西は華府條約を廢棄して、同じく同型戰艦の建造に着手すると云ふ報道がありますが、佛蘭西としては其の從來の態度から見て當然の様に思はれます。

翻つて米國は如何かと申しますると、彼は華府倫敦の兩條約に於て、權利として、

自己の欲する儘に世界第一位の海軍を整備し得ることとなり、他方亞細亞に對する政治協定を爲すと共に、日本の海軍力を自己の許容し得る程度に制限したのでありますから、此の上は之を長く持續し、且つ他國をも之に加入させて益強固にすれば良いのであつて、彼の今日欲する所は、戦債問題を有利に解決すると共に、歐洲の陸軍空軍を縮少せしめ、景氣の回復を圖り、而して自己の經濟的情況を有利に導き、其の繁榮を將來に確保せんとすることでありませう。彼が壽府一般軍縮會議に参加し、種々畫策したのも之が爲でありまして今日愈會議が行詰り、其の目的達成困難と見込をつけたので、今度は深入りして政治的混亂の過中に巻き込まれない様、巧みに手を引いて高見の見物をして居るのであります。恐らく、來るべき海軍軍縮會議に於ても、彼れは同様の方針を以て押し進まんとすることは明かなる所であります。

之を要しまするに、歐洲大戰後各國民には、戦争は恐ろしいものである、今後如何なる犠牲を拂つても、戦争は避けなければならぬと云ふ考へが一般に泌み込み、平

和條約に依て獨逸を押へ、國際聯盟を中心として極端なる現状維持主義を標榜し、一にも、二にも、聯盟、聯盟と稱して來たのでありますが、年月の経過と共に獨逸の國粹運動が熾烈となり、獨逸は遂に軍備横平等の旗印を以て、壽府の一般軍縮會議を脱退し、獨力、國家の存立發展に邁進しようとするの決意を表はしましたし、他方、歐洲大戰後の後始末に飽き足らざる國が、漸次現状維持主義に不満を感じ來り、戦後引續き、長きに亘る世界的不景氣と相俟つて、各國間に國家主義的傾向が益々濃厚となつて來ました。最近國際聯盟が、國際平和維持の最大、重要使命だとして、多年苦心研究し、愈之が完成を爲さんとして開いた一般軍縮會議も、開會後既に二ヶ年以上の年月を費したに係らず、全然失敗に歸して仕舞はうとする様な次第でありまして今日では大戰後の空氣は全く消失し、華府會議や倫敦會議に於て軍縮條約を締結した當時の空氣とも亦大に異つて居るのであります。即各國共、他を信ぜず、從來の現状維持主義とか、平和協調主義では到底國家の存立繁榮を維持することは出來ないと云ふ考になり、或るものは軍備の擴張充實を圖り、或る者は合從連衡の策に出で、各其の情

況に應じ、適當の策を講ずると云ふ状態となり、國家主義的傾向を愈顯著ならしめつつあるのであります。今度開かれまする海軍軍縮會議は、右の様な環境の内に開かれるのでありますから、曩の華府會議や、倫敦會議とは勿論、壽府の一般軍縮會議開會當時とも大に其の趣きを異にするのであります。此の情勢に處して、東洋の平和を双肩に荷ひ、爲に斷然國際聯盟をも脱退し、獨力其の所信に邁進しつつある帝國の將來を稽へ、來るべき軍縮會議に對し、吾々國民は、確固不拔の決意を以て、萬遺憾なきを期せなければならぬと信ずるのであります。

個人道徳としては、身を殺して仁を爲すと云ふ美德が存立して居りますが、國際間には、自國を犠牲とするが如き道徳は到底、又當然期待し得ないのであります。國際聯盟を中心として、各加盟國が、國際平和に盡して居ることも、詮じつむれば凡て自國の利益を確保増進することが、其の第一義であります。従て、他國との親善とか、協調とか申しましても、或る特種の場合、又或る限られた範圍の外は、最後まで之を

當てにすることは出來ないのであります。國際間に伍して行くには、最後の寄り處として、自ら頼む處を持つて居ると云ふことが絶対に必要なのであります。

國際場裡に於ては、自ら頼む處のない國は、多數を頼むとか、又は或る強大國の援助を得ない限りは、其の主張を徹することは不可能でありまして、之等の國の聲は往々にして泣き言と見られ、強國の聲には千鈞の重みあるが如く受け取られて理由の有る無しは二の次であるのが普通であります。聯盟に於て現に重きを爲しつつある國は英國及佛國であります。米國は、聯盟以外の國で、而かも聯盟國たる英、佛二國に劣らざる勢力を聯盟國間に振つて居り、聯盟を牽制して、國際間に重きを爲して居るのであります。之は必しも其の言ふ所が正義であり又公正なる爲ではなくて、實に其の背後に在る偉大なる國力の爲であります。

帝國が將來眞に東洋の平和を想ひ、正義を以て其の所信に邁進せんとしても、若し夫れ自ら頼む所がない様な微弱なる國力なるに於ては、正義も不正義呼ばはりせられ立ち所に悲惨なる憂目に遭はされるのは殆んど確かであります。滿洲問題に於て帝國

は不正義呼ばはりをされましたが、各國が四圍の環境上制肘せられて、力に訴へやうとしなかつたのと、我に信ずる所があり頼む所がありましたから、漸く斯かる憂目を見ずに今日迄濟んで來たのでありますが、今後も常に之れで濟むとは必ずしも望まれませんまい。吾々國民は擧つて、奮勵一番、益國力の充實に努め、國防の整備を期し、世界をして正義は正義として認めしむる丈けの、寄り處を築き上げなければならぬと思ふのであります。

凡そ世界に一等國として數へられる大國間には、其の如何なるものたるを問はず、不平等の約束があると云ふことは、將來に甚しく紛争の種子を残す所以であります。亞細亞に於ける唯一の大國であり、其の安定勢力として、東洋平和の確保てう重大なる使命を其の雙肩に荷つて居る帝國が、國際條約、又は取極等に依り、歐米の列強、特に英米に比して不平等なる立場に拘束せらるるが如きことは、我が使命の達成上到底忍ばれないことであります。彼の華府條約、倫敦條約の如きは何れも帝國海軍の軍備を英米の夫れに比し低比率に束縛した不平等なる條約であることは、今更茲に申述

ぶる迄もありません。是等の條約は、假令締結された當時に其の存在の理由があつたとしても、帝國の今日及將來に稽へ、國防上は勿論、國際通念上からも、斷乎排撃すべきものであります。而して、來るべき軍縮會議は、之が唯一無二の好機會でありますから、吾々國民は萬難を排して此の機會を捉へ、華府、倫敦兩條約を終焉せしめますと共に、眞に世界平和に寄與し得べき公正妥當なる軍縮協定の實現に努め他方國民一致して國力の充實を計り以て東洋平和の維持者として、名實共に動かすべからざる帝國の地位を確立しますが、絶對必要なりと信ずるのであります。

21. 34才

昭和九年十一月七日印刷
昭和九年十一月十一日出版

著者 洪 泰 夫
東京市澁谷區千駄ヶ谷町二ノ四三三

發行人 廣岡 宇一郎
東京市麻布區西町十番地

印刷人 山田 忠義
東京市麹町區富土見町二丁目六番地

發行所 東京市麹町區內幸町一ノ三(幸ビル)
國際協會

電話銀座二〇七九番

61
76